



Title	『悉曇相伝』に記述される/ハ/の発音方法
Author(s)	小林, 明美
Citation	大阪外国語大学学報. 1982, 56, p. 51-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80881
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『悉曇相伝』に記述される /ハ/ の発音方法

小林 明 美

The Articulation of the Japanese Syllable 「ハ」 as Described in the *Sittansōden* (悉曇相伝)

Akemi KOBAYASHI

Describing the articulation of the syllable 「ハ」, Sinren (心蓮) (?-1181) says, “One joins the upper and lower lips and utters [a] softly, and then it becomes the sound 「ハ」” (上下唇合喚呼 a 而成音). In order to understand his wording, “One utters [a] softly,” we have to know what kind of “sounds” he refers to as being produced in the opposite case where “one utters [a] strongly.”

He says, “Emitting air very strongly from the throat, one wishes to utter [a], and then the sound [ka] is uttered naturally” (自喉氣強吹欲呼 a 則自然被呼 ka). He also says the same about “the sound [ta].” Being a Japanese, he does not separate a consonant from the syllable and ascribes the intensity of plosion to the stress with which the following vowel is produced. He thus describes in his own way how air jets when a closure is finished for a stop to be produced. Saying that the vowel [a] is uttered softly, he refers to a syllable which begins with a consonant produced with a less closure, namely, a fricative or a half-vowel.

Next we have to elucidate his wording, “One joins the upper and lower lips.” This description suggests a labial. Then, how is this labial different from such as [p] or [m] which is produced with a perfect closure at the lips? For the sake of comparison, we refer to his description of the articulation of [ma]: “One shuts the outer parts of the lips” (閉唇外) when [ma] is produced. The lips being so narrow, little room is left for changing the place where they are joined. The place of articulation for [ɸ] or [u] is practically the same as the one for [p] or [m]. So Sinren’s “outer part of the lip” cannot be regarded as a place of articulation in modern phonetics. His wording must have come from an idea different from ours.

When we pronounce [p] or [m] with extreme care, we can join the lips tightly up to the outer rims. On the other hand, when we pronounce [ɸ] or

[u], we cannot join the lips so tightly as to reach the outer rims, because an air way has to be left open. This is why “one joins the outer parts of the lips when [ma] is uttered,” whereas “one just joins the lips when 「ハ」 is uttered.”

From what Sinren says in the above-cited passages, it follows that the consonant of 「ハ」 is the voiceless labial fricative [ɸ], the voiced labial fricative [β] or the labial half-vowel [ɯ]. When he discusses a stop or a fricative, he takes up only the voiceless one (清音). So the possibility of [β] for 「ハ」 is eliminated. And he defines 「ワ」 as “[u] + [a].” So the possibility of [ɯ] is also eliminated. Therefore we can conclude that the initial consonant of 「ハ」 was [ɸ] in Sinren’s time.

I

日本語のハ行子音がもともと両唇摩擦音 [ɸ] であったという見解を最初に出したのは Johann J. Hoffmann (1805–1878) である。¹⁾ 1868年のことであった。それから三十年たった 1898年に上田万年 (1867–1935) は論文を発表し、この前段階が両唇閉鎖音 [p] であったという仮説を立て、摩擦音化したのは八世紀よりも前であったとした。²⁾ また、1924年に安藤正次

1) J. Hoffmann, *A Japanese Grammar*, Leiden, 1868, p. XIV ff.

Hoffmann の論拠は次の通りである。a) 日本の学者は、これを唇音であるとし、サンスクリットの唇音 [p] にこれを対応させている。b) これを表記するのに用いられる漢字は、すべて中国では [p] か [f] で始まる音節を表わすものである。一方、中国語とサンスクリットの [h] には日本語の [k] を対応させている。c) これは母音間で [u] に変わる。d) 日本人と交渉し始めたころのヨーロッパ人は、これを表記するのに “f” を用い、“h” を用いなかった。このように、上田万年を待つまでもなく、重要な論拠はすべてつくされている。また、Edkins, Satow, Chamberlain が同じ問題を論じた。

2) 上田万年, 「語学創見」, 『帝國文学』, Vol. 4, No. 1, 1898.

論拠としては、Hoffmann の a) b) のほかに、a) 濁音バビブベボに対する清音は、バビブベボであるべきであって、ハビフヘホではない。b) 昔アイヌ語に借用された日本語がバ行音になっている。また、三世紀の中国で日本の人名ヒメコを写すのに「卑」の字をあてている。c) 熟語的促音(「オコリッポイ」)や方言(琉球国頭方言「バナ」:「ハナ」)に p 音が用いられるのは上古の音の名残である。d) 現在でもフは fu であり、また方言に f 音があるのは、p 音から h 音にいたる中間の段階に ph 音または f 音があった証拠である。」

ハ行子音の祖形が [p] であったことを証明するものは何もない。少なくとも『切韻』(601年)の時代までは中国語に両唇摩擦音または唇歯摩擦音はなく、したがって /p/ 対 /ɸ/ /f/ の音韻対立はなかった。『魏志倭人伝』(三世紀末)から『推古遺文』(七世紀前半)にいたる文献でハ行音に中国語の /p/ があてられているとはいえ、[ɸ] と区別した上でのことであるとは言えない。アイヌ語にも /ɸ/ または /f/ はなく、/h/ の条件異音 (/u/ の前)として [f] があるだけである。

琉球方言の分離が想像を絶する昔である以上、想像し得る過去に、すなわち文献時代より数世紀前に祖形 * [p] の存在を想定するとすれば、「唇音の退化」(橋本進吉, 『国語音韻の研究』, 1950, pp.262-27) という「国語音韻変化の一傾向」に即して想像をめぐらすよりはかかない。ただ、「唇音の退化」を認める上で橋本の論義の出発点になるのがほかならぬ * [p] 祖形説なのであり、この点のみに限れば循環論法の弊に陥るおそれがある。また他の論拠についても問題のあるものがある。

平安初期の [ui] [ue] [uo] は現在 [i] [e] [o] になっており、これだけを見ればたしかに「唇音退化」が認められる。しかしながら、十世紀末に /オ/ と /ヲ/ が区別されなくなったとき、/オ/ ではなく /ヲ/ に統一されたのである。[o] > [uo] という変化は、むしろ「唇音強化」である。また、[ue] はいきなり [e] に変わったのではなく、十三世紀以降に [ie] に統一されその状態は江戸時代までつづくのである。[u] > [i] の変化は「退化」ではなく、調音位置の変化にすぎない。合

(1878-1951) も同じような推移説を出したが、推移の時期を八世紀とした。³⁾ 九世紀から十世紀にかけてこの子音は母音間で [u] に変わり(「うるはし」[uruqasi]), いわゆる「ハ行転呼」が起こるが、この変化は [p] の摩擦音化を前提とすると言う: 「音韻変化の径路からいへば、どうしても p と W との間には F の時代が無ければならぬのであるから、奈良朝の W との間に F の時代を認めなければならぬ。」⁴⁾ (W = [u], F = [φ])

七世紀から八世紀にかけてハ行音節を表記するために用いられたのは、中国語では [p] で始まる音節を表記する漢字であった (/ハ/: “波” [pua], /ヒ/: “比” [pi], /ヒ/: “悲” [pui], /フ/: “布” [po], /ヘ/: “幣” [biei] > [piei], /ヘ/: “倍” [buei] > [puei], /ホ/: “富” [pieu]). 八世紀の中国語で /p/ がまだ常に閉鎖音であったにしても、あるいはすでにある場合は摩擦音化して [φ] または [f] になっていたにしても,⁵⁾ 八世紀日本語のハ行音が [p] であったのか [φ] であったのかを決める上で日本語で用いられた表音漢字は役に立たない。⁶⁾

九世紀までにこの子音の音価が [φ] になっていたとする安藤は、「ハ行転呼」の事実をふまえて、「無摩擦音 [u] の前段階としてありえるのは、閉鎖音 [p] よりも摩擦音 [φ] である」という音韻変化の常識をよりどころにするしかなかったのである。

つづいて1928年に橋本進吉は文献資料を呈示して、九世紀にこの子音が [φ] であったことを直接証拠によって証明しようと試みた。橋本が用いたのは、円仁の『在唐記』中に見つけた一行であった。⁷⁾

拗音 [kui] [kue] は室町時代に消え、[kua] も江戸時代以降次第に [ka] に変わった。これはたしかに「唇音の退化」であるが、合拗音はもともと外来音であり、借用の時点でとらえれば「強化」なのである。そうすると、「唇音退化」を示唆する根拠として残るのは、[φ] > [u]/[h] という音韻変化だけになるわけである。「傾向」というのは「かなり多くの個物が同じ動きをすること」であるから、一つの音韻について起こる変化だけから「一傾向」はもはや認められない。それに、[φ] > [u] は条件変化にすぎず、[φ] > [h] は調音位置の移動といえはそれまでである。

3) 安藤正次, 『古代国語の研究』, 1924, pp. 162-188.

4) 安藤, op. cit., p. 183.

5) 601年に編纂された発音辞典『切韻』は、発音によって漢字を分類整理するのに「反切法」を用いたものである。作詩法の規範書として唐代に広く用いられ、多くの流布本写本ができたが、1008年に増補校訂版『広韻』として集大成された。『切韻』から『広韻』まで400年もたっているのであるが、そこに示されている音韻体系は基本的に変っていない。当然ながら、実際の発音はその間にかかなり変わったことが予想される。

チベット文字による音価表記のついたテキストが敦煌から発見され、1933年に羅常培によって詳細な報告がされた結果、八世紀の長安方言の音韻体系がわかるようになった。韻書で両唇閉鎖音 ([p], [p'], [b]) とされているもののうち後代 [f] になるものは、チベット文字 “pha” あるいは “ha” によって音価が示されており、当時の長安方言で摩擦音化 ([φ] または [f]) が起っていたと推定される。Cf. 羅常培, 『唐五代西北方音』, 歴史語言研究所單刊, 甲12, 1933, pp. 17-18. 藤堂明保, 『中国語音韻論』, 1980, p. 276.

6) 当時の日本人留学生が、長安方言の摩擦音を日本に伝えたということは当然考えられるが、日本語のハ行音を表記するにあたって排他的に摩擦音系統の漢字を使う試みはなされていないのである。

7) 橋本進吉, 「波行子音の変遷について」(『岡倉先生記念論文集』, 1928), 『国語音韻の研究』, 1950, pp. 37-39.

II

円仁(793-864)は840年に長安で南インド出身の Ratnacandra からサンスクリットの発音を学び、それを入念に記録して著書『在唐記』の中に収めた。橋本が取り上げたのは、サンスクリット音節 *pa* の音価を記述する次の一行である。

*pa*⁸⁾ 唇音 以本郷波字音呼之 下字亦然 但加唇音⁹⁾

(〔インド文字〕“*pa*”〔の表わす音〕は唇音である。“波”の字で表わされる日本の音を用いてこれを発音する。次の文字〔すなわち“*pha*”の場合〕もそうである。ただし、唇音を加える。)

ここで橋本が目にするのは、「但加唇音」という最後の一句であり、「特にかやうな注意を加えなければならないのは、日本の波字の音が *pa* でなく *Fa* であった為であって、軽い両唇音 *F* を重くして *p* 音に発音させる為であった」と考える。「加唇音」という三語からこれだけの「推定」を引き出す根拠を示めすために、橋本はさらに“*ba*”の項を引用する。

ba 以本郷婆字音呼之 下字亦然¹¹⁾

(〔インド文字〕“*ba*”〔の表わす音〕は、“婆”の字で表わされる日本の音を用いてこれを発音する。次の文字〔すなわち“*bha*”の場合〕もそうである。)

そこで、「〔a〕 *ba* の場合には婆字の音に呼ぶとばかりで、何等の註をも加えてゐないのを以て見れば、〔A〕日本の婆は正しく梵字 *ba* の音に相当する¹²⁾」のに対し、「*pa* の場合には、波と呼ぶと云ひながら、〔b〕特に『唇音を加う』と註し〔てゐるのを以て見れば、〕〔B〕波は梵字 *pa* とは幾分の相違があるのであって、」〔C〕「波は *Fa* であったと認められる。¹³⁾

a) と b) の二つの事実を対比した上で、そこから命題 A) および B) を引き出すのは極めて理に適った態度である。テキストの他の個所を見ても、サンスクリット音に日本語音がびたりと一致する場合には何のただし書きもないが、そうでない場合は必ずただし書きがある。¹⁴⁾ 問題は命題 C) であり、これは a) および b) から導けないし、命題 B) と論理的に結びつくわけでもない。前に出した「推定」に対する根拠はここでも示されておらず、同じ「推定」がくりかえされているにすぎない。ただ、前提 b) に前提 a) がここで加わったため、命題 B) が強化されている。

8) *Taittirīyapraśākhya*, ed. W. D. Whitney, New Haven, 1868, 2. 39: oṣṭhābhyāṃ pavarge [kārye 'nyonyāṃ sparśayed adhyetā]. 「/p/ 系列の音〔すなわち /p//ph//b//bh//m/〕を発音しようとする時、学習者は、両唇を互いに接触させなければならない。」

9) 円仁, 『在唐記』, 『大日本仏教全書』, Vol. 38, 1971, p. 90, 6, l. 9.

10) 橋本, op. cit., p. 38, ll. 3-5.

11) 円仁, op. cit., p. 90, b, l. 11.

12) 橋本, op. cit., p. 38, ll. 14-15.

13) Ibid., p. 38, ll. 13-14, l. 15, p. 39, l. 1.

14) 小林明美, 「円仁の記述するサンスクリット音節 *ca* の音価」, 『大阪外国語大学・学報』, No. 52, 1981, pp. 69-70.

このように、テキストの文字だけから引き出せる結論は「日本語の /ハ/ は、サンスクリットの /pa/ と似ているが、全く同じではない」ということだけである。

さて、“pa”の項と似た表現をとっている箇所がテキスト中に五つある。

- a) ḍa 拏 以本郷陀字音呼之 但加舌音¹⁵⁾
- b) ta 哆 齒音 以本郷多字呼之 下字亦然 但皆加齒音¹⁶⁾
- c) da 以本郷陀字音呼之 但加齒音 下字亦然¹⁷⁾
- d) na 以本郷那字音呼之 但加鼻音¹⁸⁾
- e) ma 用本郷摩字音呼之 但加鼻音¹⁹⁾

まず a) c) を見ると、サンスクリット音 ḍa da のいずれにも日本語音 /陀/ をあて、ḍa については「但加舌音」と言い、da については「但加齒音」と言う。日本語音 /ダ/ はサンスクリット音 ḍa da の両方に似ているが、ḍa²⁰⁾を発音するためには舌音であることを特に強調し、da²¹⁾を発音するためには齒音であることを特に強調しなければならない。日本語音 /ダ/ を基準にして、サンスクリット音 ḍa と da を発音する場合に必要な調音位置の修正を教えているのである。ḍa の場合は舌の位置をより後に移[して舌先を後にそら]し、da の場合は舌の位置をより前に移すことになる。ta の場合も同じである。

d) と e) は事情が異なる。サンスクリットの na と ma に日本語の /ナ/ と /マ/ がそれぞれ完全に一致するかどうかはさておき、/ナ/ にしても /マ/ にしても、対応すべきサンスクリット音が二つあるわけではない。では、日本語の「那字音」と「摩字音」を手がかりにサンスクリットの na と ma²²⁾の発音を試みるとき、なぜ鼻音であることを強調しなければならないのか。この注意を怠る場合、別の音に発音する危険があることになると思えば、その別の音とは何か。

『切韻』の体系で、“那”の音価は [na]、“摩”の音価は [mua] であるが、八世紀の長安方言では、それぞれ [ˈda] と [ˈbua] であり、これが当時の留学生によって日本へもたらされた。

15) 円仁, op. cit., p. 90, a, l. 23.

16) Ibid., p. 90, b, ll. 2-3.

17) Ibid., p. 90, b, l. 5.

18) Ibid., p. 90, b, l. 8.

19) Ibid., p. 90, b, l. 13.

20) *Taittirīya-prāṭisākhya* 2.37: jīhvāgreṇa prativēṣṭya mūrdhni [sparśayed adhyetā] ṭavarge [kārye]. 「/t/ 系列の音 [すなわち /t/ /th/ /d/ /dh/ /ṇ/] を発音しようとする時、学習者は舌先を後へ捲いて [口腔の] 頂点の所で接触させなければならない。」

21) Ibid., 2.38: jīhvāgreṇa ṭavarge [kārye] dantamūleṣu [sparśayed adhyetā]. 「/t/ 系列の音 [すなわち /t/ /th/ /d/ /dh/ /ṇ/] を発音しようとする時、学習者は舌先を歯の根元に接触させなければならない。」

22) *Tribhāṣyaratna* ad *Taittirīya-prāṭisākhya* 2.30: nāsikām anuvartanta ity anuṇāsikāḥ 「鼻 [の穴] に添って行くのが鼻音である。」口腔内での接触の場所については、/n/ は /t/ と同じであり、/m/ は /p/ と同じである。Cf. 注21), 8).

23) 敦煌資料では /m/ と /n/ がチベット文字で “b” と “d” として表わされているので、八世紀の長安方言ではそれぞれ [ˈb]/[mb] と [ˈd]/[mb] であったことが示唆される。ただし、音節が /n/ /ŋ/ /m/ で終る場合、頭音 /m/ /n/ にこういう変化は起っていない。Cf. 羅常培, op. cit., pp. 29-30.

“那”と“摩”の呉音がそれぞれ [ナ] [マ] であるのに対し、漢音が [ダ] [ナ] であるのはこういう事情による。このため、“那”と“摩”は古くから /ナ/ と /マ/ の表記に用いられていたが、『日本書紀』で“摩”の同音字“麼”“縻”“磨”が /バ/ の表記にも用いられており、“那”の同音字“娜”が /ダ/ の表記にも用いられている。『日本書紀』で、“麼”は /バ/ と /マ/ のいずれをも表わし、“娜”は /ダ/ と /ナ/ のいずれをも表わすのである。

“那”と“摩”を日本人が使う場合、有声閉鎖音を表わす可能性と鼻音を表わす可能性がある。そこで、サンスクリットの *na ma* を発音するときは、「鼻音であることを強調せよ」というのが円仁の指示である。

このように、「ある音を加える」というただし書きは、漢字で表わされる日本語音に可能性の巾を想定した上で、「その範囲内の特定の音であることを強調せよ」と指示するものである。このような場合には二通りある。a) ある漢字で表わされる日本語音を手がかりに問題の外国音の発音を試みようとして、特に注意深く発音すればその外国音となるが、いいかげんに発音するとそうはならない場合に、「[調音位置を意識的にずらして] その音であることを強調せよ」と指示される。b) ある漢字が二通りに発音する習慣があつて、そのどちらかが問題のサンスクリット音に一致する場合、「どちらかであることを強調せよ」すなわち「意識してどちらかを選べ」と指示される。

さて、“波”は日本で排他的に /ハ/ を表記するのに用いられた。そうすると“那”や“摩”のように表記に二重の可能性があるわけではない。そうすると、「加唇音」というただし書きは、*ḍa ta da* の場合と同じように、「/ハ/ を手がかりにサンスクリットの *pa* の発音を試みる場合、調音位置を修正せよ」という指示である。

このように、テキストから知られる限り、「ある音を加える」というただし書きは、その音を「強く発音する」すなわ「閉鎖度を高める」という意味で使われていない。「加唇音」という表現は、閉鎖度ではなくて、調音位置に言及しているのである。

閉鎖度に言及する場合に円仁がとる表現は全く別である。

va 以本郷婆字音呼之 向前婆字是重 今比婆字是輕 有人以唐国嚩音呼之 甚錯²⁴⁾

(〔インド文字〕“va”〔の表わす音〕は、²⁵⁾ “婆”の字で表わされる日本音を用いてこれを発音する。〔ところで、“婆”の字で表わされる日本音は、すでにインド音“ba”にあて

24) 円仁, op. cit., p. 90, b, ll. 18–19.

25) *Taittirīyaprāṭisākhya* 1, 8: *parāś catasro 'ntasthāḥ*. 「[25の接触音に] 続く四つ[すなわち /y/ /r/ /l/ /v/] は半母音である。」このように、/v/ は摩擦音 (*uṣman*) ではなく、母音 /u/ に対応する半母音とされる。

Tribhāṣyaratna ad Taittirīyaprāṭisākhya 2. 43: *vakārye 'dharoṣṭhāntābhyām uttaradantāgraiḥ saha sparśayet*. 「/v/ を発音しようとする時、[学習者は] 下唇の二つの先端を上歯の先端と接触させなければならない。」そうすると、下唇の左右両端を上歯に接触させ、中央部に空気通路を残して発音させることになるから、/v/ は唇歯無摩擦継続音 /v/ である。現代のインド・アリア語では、接触を中央で行い、空気通路はその両側に残される。Cf. D. Jones, *An Outline of English Phonetics*, London, 7th ed., 1949, p. 167.

ている。ではこの場合はどう違うのか。) 前に“婆”の字〔で表わされる日本音〕をあてた方〔すなわち **ba**〕は重い。〔ところが〕今ここで“婆”の字〔で表わされる日本音〕をあてている方〔すなわち **va**〕は軽い。中国の **biua** [k] (嘑) の音を用いてこれを発音する人がいるが、はなはだまちがっている。)

これを言葉通りにとると、サンスクリットの /v/ は、有声両唇摩擦音 [β] として聞かれたということになる。

閉鎖度を示す「重・軽」という表現をとらず、調音位置の修正を指示する「加唇音」という表現をとっていることからわかるように、円仁は /ハ/ の頭音を [p] とは見なしておらず、サンスクリットの /p/ と比べて調音位置が少しずれると考えているのである。

では、/p/ の調音位置とは違う調音位置とはどこか。そこで調音される音はどんな音か。これが次の問題である。この問題はもはや円仁のテキストだけでは解けない。『在唐記』のサンスクリット音記述が今日でも非常にわかりやすいのは、円仁の音声観察と記述の方法に極めて高い普遍性があるからである。九世紀という時代を考える時、これは驚くべきことである。しかしながら、こういう古い資料を扱う時、すべてを現代人の発想で律するのは不可能である。文献学の目的は可能な限り著者の意図に即してテキストを理解することにあるが、『在唐記』が極めて特異な資料である以上、この場合は広く平安時代の悉曇文献の中に問題を解くための手掛りを求めることになる。

III

橋本は中国資料によって十三・十四世紀のハ行子音を [ϕ] と推定し、さらに平安末期の資料として心蓮の『悉曇口伝』を取り上げる。

以唇内分、上下合之 呼 **a** 而終開之 則成ハノ音

以唇外分、上下合之 呼 **a** 而終開之 則成マノ音²⁶⁾

(〔/ハ/ を発音する時は、〕唇の内分を用いて上下〔の唇〕を合わせ、/a/ の声を出して最後に口を開く。そうすると /ハ/ になる。)

(〔/マ/ を発音する時は、〕唇の外分を用いて上下〔の唇〕を合わせ、/a/ の声を出して最後に口を開く。そうすると /マ/ になる。)

/ハ/ と /マ/ の違い、すなわち /ハ/ と [pa] の違いは、唇の「外分」を合わせるか「内分」を合わせるかだけにある。「F音の場合は、mよりも、もっと内側（後方）で唇を合わせるのが常である」という理由で、「波行子音は、やはり両唇音の Fであったのであらうとおもはれる」と橋本は結論する。しかしながら、ここで理由命題として示されているのは、心蓮の言葉のくり

26) 心蓮、『悉曇口伝秘中秘々』、金剛三昧院本、1234年写、1496年再写、5丁、裏、1.9；6丁、表、1.2。橋本、op. cit., pp. 36-37.

かえしにすぎない。/ハ/ の子音が [m] よりも唇の後方で調音されるとすれば、[m] は /ハ/ の子音よりも唇の前方で調音されることになる。こうして、「両唇音 [m] [p] と調音位置を異にする両唇音」という矛盾に陥いる。たしかに心蓮はここで調音位置を問題にしている。ただ、心蓮のやり方は、我々とはかなり違った発想に基づくものであるらしい。心蓮がどういうつもりで「内分」とか「外分」とかいう語を使っているのか明らかにしない限り、このテキストは資料として無効である。

平安時代のハ行子音の音価を知るために取り上げられた資料は、橋本以来『在唐記』の“pa”の項と『悉曇口伝』の /ハ/ の項の二つだけである。この二つがこの程度にしか扱われていない以上、「平安時代およびそれ以前のハ行音が、[p] ではなくて [φ] であると確言できる証拠というものはないのである²⁷⁾」というのが現状である。

IV

平安時代のハ行頭音の調音方法を具体的に記述している資料が一つだけである。心蓮の『悉曇相伝』である。/ハ/ の項と /マ/ の項を以下に引用する。

上下唇合喫呼 a 而成音

閉唇外極強呼 a〔而〕成音²⁸⁾

(上下の唇を合わせて、やわらかく [a] の声を出す。そうすると [ハ/ の] 音になる。)

(唇の外を閉じて、極めて強く [a] の声を出す。そうすると [マ/ の] 音になる。)

ところで心蓮は、「舌の根元を口蓋に付けて、喉から空気を強く吹き出そうとして [a] の声を出せば、おのずから /カ/ が発音される²⁹⁾」とか「舌の先端を歯の根元に付けて、空気を強く吹き出そうとして [a] の声を出せば、おのずから /タ/ が発音される³⁰⁾」と言っている。閉鎖が解かれた時に空気が流出する状況を描写しているのである。

/マ/ の発音方法を「極めて強く [a] の声を出す」と記述しているのは、まるで閉鎖音のことを言っているようである。『悉曇相伝』の /ナ/ の項、『悉曇口伝』の /ナ/ の項、/マ/ の項を見ても、鼻腔への空気の流れに心蓮は全く気づいていない。口腔内閉鎖が解かれた時の状況について、鼻音の場合も閉鎖音の場合と同じように空気が噴出すると心蓮は感じていた。そのような心

27) 馬淵和夫、『国語音韻論』, 1971, p. 71, 注1)。なお、『在唐記』の記述に基づく橋本の「推定」に反対して、宮嶋弘が当時の /ハ/ の子音を [h] と解釈し（「平安時代中期以前のハ行子音」, 『国語・国文』, Vol. 14, No. 2, 1944, pp. 17-42）、亀井孝が [p] と解釈した（「在唐記の『本郷波字音』に関する解釈」, 『国語学』, No. 40, 1960, pp. 126-131）。状況証拠（「八世紀に /ハ/ は [pa] または [φa]」を前提として、消去法によって「推定」を下すために、橋本は『在唐記』の記述を消去の根拠として用いた（/ハ/ ≡ pa, ∴ /ハ/ = φa）。橋本の「推定」は結果的に見れば正しい。しかしながら、宮嶋や亀井のような誤った解釈が生ずる余地があったのも、橋本のテキスト処理と論旨展開が不十分であったからである。

28) 心蓮、『悉曇相伝』（金剛三昧院本、表題・コロフォンとも欠く）、68丁、表、ll. 2-6。

29) Ibid., 63丁、表、1. 8-裏、1. 2: 口音者付舌根於腭而自喉氣強吹欲呼 a 則自然被呼 ka。

30) Ibid., 63丁、裏、ll. 7-8: 舌内者付舌端於齒根而氣強吹欲呼 a 則被呼 ta 音。

蓮が、「極めて強く」ではなく「やわらかく声を出す」と描写する場合、母音に先立って出される子音は、閉鎖音ではなく摩擦音または半母音ということになる。

さて、/ハ/を発音する際の発音器官の動きについて、心蓮は「上下の唇を合わせる」と言っている。/ハ/は両唇摩擦音 [ɸ] [β] または半母音 [u] ということになる。そうすると、同じ両唇音でありながら、摩擦音や半母音の場合と違って、/マ/の子音の場合は「唇の外を閉じる」というのはどういうことなのか。唇は発音器官としては巾の挟いものであり、両唇を合わせる場所を変える余地はほとんどない。普通に発音する時、[ɸ] [β] [u] を発音する場合の唇を合わせる場所は、[m] を発音する場合とほとんど変わらない。ただ極度に念を入れて [m] を発音する際には、外縁近くまで両唇を密着させることができる。ところが、摩擦音 [ɸ] [β] や半母音 [u] を発音する場合は、狭いながらも空気通路を残さなければならないので、両唇を密着させることはできない。まして唇の外縁近くまで合わせることなどできるわけがない。/マ/の場合は頑張れば唇の外縁近くまで密着させられるのに対し、[ɸ] [β] [u] の場合はどう頑張ってもそういうことができないため、「唇の外を閉じる」とは言わずに、単に「上下の唇を合わせる」とだけ言っている。ところが、『悉曇口伝』では、同じことを言うのに対照表現をとり、「/マ/の場合は外分を用いる」のに対し、「/ハ/の場合は内分を用いる」と言う。「外分」と「内分」という対称配置は、シンメトリーを求める心理が生んだ虚構である。

最後に/ハ/の子音は [ɸ] [β] [u] のうちのどれかという問題がある。ところで『悉曇相伝』においても『悉曇口伝』においても、心蓮が取りあげるのは常に基本音と見なされる「清音」のみである。したがって、[ɸ] と [β] のうち、「清音」ではない [β] は排除される。さらに、心蓮は/ヤ/を [イ] + [ア] であるとし、/ワ/を [ウ] + [ア] であるとしている。したがって、[u] を頭音とするのは/ワ/であって/ハ/ではない。心蓮の記述する/ハ/は [ɸa] であった。

インド音声学とは違って、日本の悉曇学では調音方法に比べると調音位置に関心を持ちすぎ、「三内」とか「相通」とかについて混乱と無秩序の体系を作り上げた。せっかくの努力が混乱に終わったのは、調音方法に対する十分な考察に欠けていたからである。例外的に調音方法に強い関心を持つ心蓮ですら、鼻音の実体がつかめなかったのである。

「外分」「内分」という語を初めて使ったのは心蓮である。しかしながら、この用語法の背後にある着想は、「ハ行子音はサンスクリットの /p/ とよく似ているが、調音位置がややずれる」という円仁の考えにつながるものである。